

911.32

才下

東阳道志

下

奥細道舊跡抄下

找前丸墨 落葉庵梨一擇

志垂碑

是もも株郡松峯の邑あ所ノ界ハ附緑より記すは碑

ハあり多契城ノ前裁竹壺中石之ちふ立一石ナリは  
バの、一碑もと云ハ碑ノ字乃和訓也後括邊集ノ大條云慈國の莊船  
云（是）所とせり又少くハヤ蘇一石ナリとヤつてアタクル逸  
みち抄ノヨリモハ無れども之は碑（和訓  
木本）落葉庵梨の竹を真御と呼べ川上之處乃ウシカレル（落葉  
庵梨）

○按ルニ庭中ヲツボト云ハ本壺ノ字ナルベレ  
音柵爾雅宮中術謂之壺ト是ナリ瓶屬ノツボハ  
壺ニテ音古ナリ然ニ今門内前裁ナドヲツボノ  
内ト稱ズルハ壺ト壺ト楷書ノ字形紛ハ  
シキヨリシテ終井ニ其和訓一デヲ誤ナリ

四維園界之數里ともすルニ數里ハ里數ノ書誤ナリ

ルベレ碑面ニ四方國界ノ里數此城神龜元年按  
ヲ勒ス猶附錄ノ圖ニ見ベレ察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所置也

天平寶字六年參議東海東山節度使同將  
軍惠美朝臣攜修造而十二月朔日と有此數  
乃碑文ヲ抽出シタルモノニテ府ハ府ノ誤所里ハ所  
置ノ誤猶ハ獨ノ誤ニテ且朝ノ字ヲ脫ス惠美朝臣ノ  
名ハ朝鶴ナリ猶附錄ノ碑面ニ委レ聖武皇帝の由來より  
聖武ハ反正帝ノ皇子人皇四十五代ノ帝ナリ山ツ  
皇帝ノ號ハ中華ニテ秦始皇ヨリ起ル三皇五帝ノ義ヲ取ト云山ツ  
川爲了石あつたより石ハ山て古より木ハ  
老く木小かソリ也古文前集李白蜀道難詩地崩山摧壯士死不選古詩古

墓碑鳥田松柏摧鳥薪ド是等ノ風情ナルベレ  
古人の心と寃す記念ハ俗ニカタミト訓ズヨク心  
書ニ歴觀也トアリ見メグラスフナリリ翁の一往在常め性ひ羈  
旅乃ツ方とワツリて行脚羈旅ノ解ハ皆前ニ記ス存  
アルト云意ナリ羈旅乃勞とワツル  
てヒ詩所樂自忘疲ト云サヘナリ

列傳  
アリより即因のモ川沖の石ヒム無肥田村モ川本名ムモ川  
のうち少く名無き新草名無ハ以風としてものく神田乃玉川周  
ふくこ篤因冲の石ハ未乃去ひのくも少からり新草未亦多も無  
ひよくてぬ仲を石の人モ一新草少く者も少一新草無  
少すちケル冲の石ハ少く小も後人附会して付する名も  
アレ被波の多ハ少くよりてありて稱洋す有  
石名石と云はるの多ひ乃石乎源也ハ哉也末のねゆらぢタ成

先づ木末松山と云ふ中

契乃木末も木の末いハ葉赤色トモドモテトツノモ  
サキミ  
ちまきりきかがく神トモカシムトスモの木末山波ニシテ  
トハト赤原え浦う波の名市く尼波移小万葉抄おと源一  
云レドノヘムトハ化心也君波トモクおとんとくとくとトマリミ  
すく木末山波もととあくハルクホトニサトニサトノ木末  
山波木末木末山波乃木んせギツモ底を底をとちぢギツモリギ  
施赤くあやんつモヨクモリトヒアリモクモリ満春  
トモクモリ彼印モ底トモ浦けちやれトモトヒアリモクモリ  
トモクモリトヒアリモクモリ人氣のかりとヒアリモクモリ  
タモクモリトヒアリモクモリ人氣のかりとヒアリモクモリ  
えんミヒアリモクモリハルモクモリ人氣のかりとヒアリモクモリ  
木末山波木末木末山中木末モリヤナスヘ木末モリトモ木末  
トモクモリトヒアリモクモリトヒアリモクモリ樂天長恨歌在大願作  
比翼鳥在地願爲連理枝ト云句ヨリ出タル故事ニテ  
比翼鳥ハ爾雅云南方有比翼鳥焉不比不飛其名謂之

鶼鶼郭璞註似鳬青赤色一目一翼相得乃飛ト連理  
枝ハ山海經ニ見タリ兩枝條理連比相生者也ト云  
づるの浦入わ乃うねとゆハ名み契セ浦少くもあぐ  
ヒヤキ笑セ浦寃と云本ナヒテ城亦あが葉の浦ナリ  
もものくか浦前くハジルトヒテの浦こくみ共縁もものく  
縁縁う唱もかど近ト  
木のよう浦も名下まで名づかぬのうのうの  
ナリナリトヒテう浦の色の浦ナリ  
ハある

又木末松山の名也トシテ奥  
上木りとよしのばうくる木をかうもあづる  
木を、木末松山の名也トシテ奥

木を、木末松山の名也トシテ奥  
木を、木末松山の名也トシテ奥  
也、茫茫無所見也ト云琵琶ハ釋名云本胡中馬上所鼓  
推前日琵引手却曰琶因以爲名ト然ハ本批杷ノ音

先づ木松山と云ふ中  
暑き夕とのハ枝とつゝゆ

中畧

鸕鷀郭璞註似鳶青赤色一目一翼相得乃飛ト連理  
枝ハ山海經ニ見タリ兩枝條理連比相生者也ト云  
づるの浦入わぬと云甚矣のうへ主海神名也  
名みかせ浦川も原也  
而千笑共海竜ともありは城亦あがまの浦也アヘ古今大字  
うちのくを原川ハ河川と云ひの浦とくあら縁よのちーも  
籠づ鳴もやど近ー先のまうゆも名所として海のうの  
浦や小河也古今大字不拂也承セニと云ひ  
アヘりく海の色の浦小つあぐらもととみえん  
ハある  
アヒモ、多秋日育法師の隠居と云ふ事奥  
上よりとソシの法事のあめりもあらず云

ヲ假ナリ 奥也よりとも今係乃仙臺海濱福と云ふものあくま  
く義施夷州アリシムアカヤト仰リシテ海もく上よりハ對國秀  
吉云の侍女阿國ト云ふ牛若丸ヤニ前矢低乃長谷姫海濱  
娘と云ふと稱く事と云ふ十二辰と名づく後京原小鷹也  
檢校津角於豫と云二人の替者河原と云は十二辰より解と付  
うを始む是より一ノ淨福湯社名アリト云平家ハ平家物  
やと云ひと云住法あり日向の作坐て坐仏と云替考秋深卷下  
合也始也と云ひ俊然並木ナリアリ樹する小仙臺寺有り舞也漸小也  
ものより八幡高飯後村あや云名高り哉お古事若代ニモ  
門也と幸あれ坐屋臺頭のニ流毛と云ひすびハ部乃あるく  
いあらえと云ひ色古の遺風哀れむるもとうに付傳  
みる。遺風ハ風流也の事と云ふハ俗語乃くアリて有  
諸善法最爲殊勝ト云リ但日本  
ノ俗話ニ用ルハヤサシキ意也 早朝施うるの爲御  
小宿國守弗無キルて實也ふくく形様

チヒモウシヨ石の階九仞小キナリ 階ノアリ四脚ハ別  
祭神味耜高彦根命當國一宮也相傳當社明神始テ鹽  
ヲ制スルヲ教玉フト國守ハ仙臺侯ナリ言在ぬ也  
一ノハ中臣被下津磐根仁宮柱太敷立テトアリ彩様  
イロドルタルキト訓ズサレキナル何レモ宮社ノ莊嚴ヲ稱  
ズルナリ仞ハ八尺ヲ云サレ比九仞ハ汎ク高  
キヲ云フアリ尚書所謂鳥山九仞ノ類是ナリ 五箇の  
風俗有リと 風俗ハナラハセラ云  
之の奇進トコトコ 子夏詩序變風易俗レバ 云治之子斗和泉  
テ下ニ詳ナリ此年秀衡死スト云 和泉三郎名ハ忠衡秀衡力三男ニ  
奇ハ寄ノ字ノ誤ナリ渠ハ勇義忠孝の士也佳  
名今トありて焉ハすくいゆもアリ忠孝  
の士と云々接するが少義施夷州云々あくま小秀衡死す  
トおゆて婦子孫也左多次男伊達ひ云とゆにて一席あ

中々叛逆して義姫と攻す忠衡もより戒経より云  
ては歸すて義死はとすり夫より父のを令すとやうて義  
姫と極まるハ孝也より義強ナ仕ゆかうり足ふるに必ず  
ノテ義姫小治ムハ義ニ強ル戰死すれハ勇氣架佳ハ善  
也佳名ハ聞エヨキヲ云 徒人旅道と勤義と守一ともも  
少しおもむくとづかとすり 勤ハ疑クハ勵ノ字ノ誤  
可操義名亦 ナルベシ七書六韻勵道ヲ  
從矣ト云リ は既ナ千年小ちのト取ヒテ松鴻  
小ワノ故其間二里餘雄嶋の後又つゝ年小ちの  
木之松一木ハス吉がくに後もよりぞり 亂世葉高小きく松  
のううも風の吹く所あへんにれりとましますとタク 素性  
清らかと御嶋と書卫門の元佐屋乃友也とも云言博都の名下不  
く他、うハモテ先手もあらず おまけに雄嶋のことを説くがハ其尺  
セモ和氣をもつて處のあゆの袖もふもぬき  
り手も身も一もあらかハリ

殷家門太師

列  
序

梓ノ木アリトナリ松海ハ技衆第一のゆゑ  
モテル允洞庭西湖と稱バ畧浙江の湖とシテ  
梓ハ利文ニモハねこス洞の木也ミヨリ少焉ニ用ひ灌漑乃  
柳トモ多キ矣有リトモナリ少トビドハ本高リレドモナリ俗ナリ  
古名ナリトマシト云ガムトシ中ノ木ハ助縛モリテ枝葉も少ホトモ  
「ソノ木の異名ナリヒナリモニタニハ別ナ一國ナリナリ」淮  
南子ヲ註扶桑東方之野也楚辭註扶桑木名日出其下和  
漢三才圖會扶桑國在大漢國東其土多扶桑木葉似桐  
實如梨ト云是ナリ但ニ二テハ俗ニ從テ日本ノト  
ト見ベシ第ニトハねほハ竹也アシモ唯李叔同のモリモ佐  
木也トホナリ第ニト称ハ好風ハヨキ風景ト云フナリ  
凡ハ字書ニ皆也ト註ス俗ノソウタイトト云ニ同ジ洞  
庭ハ中華ニ名高キ山水ノ地ナリ洞庭湖アリ一名大湖半巴  
潭州ニ屬シ半ハ岳州ニ屬スト云西湖ハ鄂州ニ在ト  
是等ノ風景ハ王弇州ガ四部稿及ビ熙朝樂事等ニ詳  
ナリ浙江ハ中華ニ汪ノ一也字彙云浙江在錢塘出歙

あふる

ふ

縣玉山因水勢曲折激起湖頭故曰浙江ト日本九州ノ西ニ當リ日本へ往來スル海舶ノ港ニテ繁華ノ地且景色無雙ト云其潮ヲ稱ズルモノハ詩廬山烟雨浙江潮潮沫到千般恨不休到得歸來無別事廬山烟雨浙江潮○揚楫れよ松島ハ又やう第一の波高め地すレバ波ううれと旅だんうるせ一時ももちどくかく旅代更ヤキル一會舟とあはれ首よ打乃もとゑく旅代更ヤキル一會史記列傳の始伯夷傳舟首よ夫のよあるがく船乃ふ乃あれはそのよふ船とソダツフリト考へるト立似兒孫厚曲とのつゝもとめりのどくせのまく宵

杜甫草堂歌  
詩諸峯羅

も波ふ勧釣けあらむる漁君ねむうり歌ハ或を倚あもとつてもぐふと云詩大雅誕實爾訟心孫よすのどく

ううえすものぞのわざや進化の天工ソグ

きほん人の業とあらむしゆとあらむ  
ノ字ヲ用ベシ家語南山有竹不操自直荀子蓬生麻中不扶自直又矯ハ矢ヲタムルヲ云晉ハ字彙ニ深遠貌子トス美人の形と極めてハ東坡西湖詩欲把西湖比西子淡粧濃抹極相宜一云此意ナリ西子ハ西施ヲ云越王勾踐ノ臣范蠡ガ吳王夫差へ贈レ美人ノ名ナリ淡粧濃抹ハウスクケハニコクケハフヲ云ちともや折とも人一そまゆおふぢともやあることはゆとひりとく松洞あがみゆせ続かず又神事ゆるか劍祓と牛と馬と祭也と神の攻防ふ時その性をあわぬ初と確被り折ゆ尊ばきさうせきと見亦さほくは役玉やと爲ん力ゆかりでしも、あゆうりやあゆうちくくと舍大山すハ大山祖神ヲ云山神ナル故ニあざのつくるや

此神出生等ノハ日本本見タ造化ハ正字通云天地陰

陽運行萬物生息謂之造化ト天土ハ俗ニ云片ハ天地  
自然ノ細土ト云ガ如ニ但造化天土ノ文ハ或ハ賈誼  
鵬鳥賦云造化爲工萬物爲爐ノ句ヨリ出ルカ  
の人う業とゆふ視と有二んとハ三體諺孫鯤句寒暄皆  
有素孤絶画難形容ト云ガ如ク  
俗ノ手ニ及バスト云フナリ

甚るう歎の底

雪うみ移はのゝの室乃紅

すう君御印ハ高麗某のものと傳  
居と曰時代の人と云傳説未詳

モロムのすハシタ  
下ふそいを將わのあほよ世とつゝ人も將ハ玉幕ニ  
鼻俗ノアト云詞ニ當ルベレサレビ和文ニテハ多  
ク且ノ字ノ意ニ用來ル世とつゝ人ハ世捨入ラ云但  
此二句ハ唐詩遼無名号偶來松樹下高枕石頭眠ト云ル  
句意ヲ以テ見ベシ

二門と仰く風雪の申ハ孫宿するもアヤ

ノきよぐれ妙なるつ化ハセシ此段ハ詩軒窓

爲月開ド云何

似山中臥白雲チド云風情ヲ得文章簡ニ  
シテ盡セリト稱スベシ妙ハ奇妙ヲ云

松雪や轉る身どうれは

是也

けらの趣向ハ古きなりと  
是也今失るなり

まふ坐立游歩侍あり不妄適なづく

まふ坐立  
温土山

和氣と放くる畠松雪湯すづあら所

口氏

口氏よりて初ハ行幸と云中止りあると云喚モトリ志士  
堂と云ふ祖廟の信友もり一花子他社も耶と日つちう  
ホウダニヤ信友の門人あるが  
ホウダニヤ松雪と業とて東武深川子伯すが人かく是も其の  
友ありもよらむ木を西とひ縣令乃少夫をつとめく死  
は其子店を喰とども父子先主死一々ハ計か  
お風ぞうハモドキ小アソブり因ふも翁のう弟をあや

十一日歸石寺よ詣畧坐の重の事のひゆ

中畧を経て雪舟和尚の法化の跡と七堂観音なり

了全聖莊嚴寺と釋仁去國號乃大伽藍と

ハ有りて是れ彼歎佛也の如いづくらやもる

くる。釋名も松鷗も正福家も雲居寺もハ雲居禪師也。又人  
號ス開山法心和尚ハ常州真壁郡ノ人故ニ俗名ヲ真  
壁平四郎ト云。少時仕宦ス一旦過アリシニ主人休眠  
ヲ以テ平四郎ヲ擊。平四郎大ニ恚怨シ其木屐ノ缺タ  
ルヲ抱テ走出。遂ニ僧トナル。其後ニ至テモ猶此木屐  
ノ缺ヲ錦袋ニ入。頸ニ掛テ動止コレヲ放タズ人其故  
ヲ問ニ曰。是我師也。ト終ニ宋ニ入テ臨濟宗ヲ傳。歸朝  
シテ瑞岩寺ヲ開。此寺今曹洞宗ト成。其時偈示一住徑山弄風光歸  
來坐。圓福道場法心覺了無一物本是真壁平四郎ト德  
化ハ孟子德化盈紛敷玉篇德惠也化教化也ト云メク

ミラセユルヲナリ。七堂ハ講堂。山門鐘樓鼓樓庫裏浴  
室廁ノ七ヲ云。又誤說蔓ハ字彙ニ屋棟也。ト云金壁ハ壁  
ヲ金張附ニレタルヲ云。但此壁ハ或ハ碧ノ字ノ誤カ碧ハルリ色ニテ  
律龍門詩註山在佛寺。金碧照耀ト云。是ナリ。莊嚴ハ太智度論。七寶莊嚴字彙。莊嚴飾也。ト云伽藍ハ釋氏要覽云。僧伽羅摩此云衆園。圓機活  
法云梵語題云。僧伽藍摩或云僧伽羅摩。此云衆園。園者  
生植之所。佛弟子居之取生植道本聖果之義也。五分律  
云。餅沙土施迦蘭陀竹園爲始也。ト按ブルニ上ノ說ニ依テハ伽  
藍陀ヨリテ僧伽藍摩ト云。又上下畧シテ伽藍ト云。今云寺ノハナリ。足佛靈ハ元亨釋書云。釋見佛居奥州松  
嶋。其地東溟之濱。小嶋一百數。其尤者曰千松鳴。佛結茆而居。精勤苦練。十二年其間誦法華滿六萬部。其後不  
詣數屢顯靈應。天仁帝聞道譽。賜佛像寶器而旗異之。依  
茲十一人改千松曰御。鳴今ノ雄。

別段  
十二年平和ムとつゞ一筋。收そのねがごとえの居  
あとゆよ傳。畧經苑薦葉の性うのみち畧石乃

坐とソニ清々也 平和源ハ秀衡居役の期ニテ今ミ陽橙  
 おと云御事云事かお居館を毎至る處乃少レアリアリ  
 てあすア戸小ハ秀衡の娘おち良國衡の妻也而ニ秀忠衡  
 がおもて居在るをもニ又毎至る院付東シテ加賀守と名  
 付テ亭室ある秀衡の子也居すと云 按此は平家流後裔の通  
 行のもの也ハ伊勢や近江國の者也と云 南北朝方葉下更ニ云おもて松に  
 行のはとよつとひ六ヤ一ととよしもるあく松絶乃松也又  
 とおし竹子一ちた木松とも云猿松かぶのむすえ乃松の名  
 もつゝ一トケテあれ神のあまく小室松と称シ一一名不名  
 雉兔芻蕪ノ芻ハ芻ノ俗字ナリ孟子曰文主之固方七十  
 里芻蕪者往焉雉兔者往焉趙岐註芻蕪者取芻薪之  
 賤人也雉兔者獵人取雉兔者也ト云リ此ニ雉兔芻蕪ノ  
 行カフ道トハ言ハ唯草カリ木コリ獵火ナドノ往來  
 スル野道山道等ニテ正キ往還スヂニアラザルヲ云  
 石の雲ハ松岩乃東北八里也トヨ立繁蕪乃地之濱ハ  
 湊ノ字ノ誤ニテ湊ハ正字通水會也ト註ス海邊ノニ  
 人ノ多ク聚ル處ヲ云故ニ今俗海舶港也ノ名トス

### うねふへとよりみててもうる金花山署窓竹鷲立つ

すより あうのふさくとよくとハ方樂すをうにの御代也  
 かんとひつぬあれみちのく山よこう林をれさく森  
 ますとせかをとあおより禁をへきじよきとくま山も  
 仙志の御石乃方木布れ行役十三里をりゆハ辯才也と  
 勝益す日お三の御天井もうちと云幸する大金もとらうけ山  
 岩破をり御金あり至る御奉事のあう小山より御金也  
 金成献は是と東大寺盧舍那佛乃御代とらう續日本紀  
 聖武天皇天平二十一年陸奥小田郡貢黃金と云是也  
 又はすきむ學纂の傳も生まむ御海鏡ハ御金也と云て皆金  
 人有りてあり金を御亂と稱して名産とす高麗は種もて多  
 く仁治乙未の御朝もとばかりりとくとくやう中華ニテ  
 モ人家ノコニアヒ立ツバキタルラ人烟稠ナド云リ神のワタリ尾ぬちの松  
 の木

中

戸伊广と云ふ一帯にて

神のり

めうの教うゆとうやうは、まもて袖をつり、川をくまぬ  
乃あく、新井をき、うちのくわゆへうのち、川へうらふゆをて、  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
くね、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
とふおと戸伊  
六、古跡があらず

### 三代、乃采穂一殿のゆすりて、中、秀衡

乃采穂一殿のゆすりて、中、秀衡  
三代、ハ清衡、基衡、秀衡、ヲ云。清衡が父ハ俵藤太秀郷、六  
代ノ後胤、且理權木夫、經清トテ安倍貞任ガ妹聟ナリ  
前九年ノ合戰ニ、經清貞任ニ屬シテ戰死ス。賴義、經清  
ガ寡婦ニ二十歳ノ男子ヲ添テ、武則ニ賜リ、妾トス。此男子  
ハ、乃清衡ナリ。其後、武則ガ實子、武衡家、衡叛逆ス。清  
衡一人、義家ニ屬シテ、戰功アリ。是ニ依テ、奥州、靜謐ノ  
後伊澤加賀江刺繆桂志波岩手ノ六郡ヲ賜リ。テ清衡  
基衡、秀衡、三代ユレヲ領シタリト云。一、贋のゆすりて、

中華ニテ富貴ヲ願タル旅人ニ、呂洞賓ガ、一ノ枕ヲ與  
テ眠ニ著シム旅人夢ニ帝王トナリテ歡樂ヲ極シニ  
忽太子ヲ失ヒ、后妃ニ別悲ニ沈ト見テ、夢サメス。其眠  
タルノ籠ニ粟飯ヲ炊、間ナリレト。沈既濟、枕中記ニ見  
タリ。是ヲ俗ニ耶鄆枕ト云。秀衡が居蹟ハ前ニ見タリ  
因縁よ、とハ文選古詩古墓、葬爲田松柏權爲薪ト云  
ル形容ナルベシ。金雞山ハ秀衡建立ノ伽藍地ナリ。或  
書ニ云、當國ノ中心山ノ頂ニ、一ノ墓塔ヲ建。寺院ノ中  
央ニ多寶寺アリ。其中間ニ路ヲ開キ、往還ノ便トス。次  
ニ釋迦堂、兩界堂、兩部ノ諸尊ハ皆金色ナリ。二階太堂  
ハ高丈五、三尊ノ彌陀ヲ安置ス。金色堂ハ内殿皆金色  
ナリト云。ノアナリ。○掲、もううす。以一殿ハ是三代の秀うと連ん  
ぐる。又、塔と更、でもぞく記乃神宇堂す。されど記も  
従う劣せをあひ、云、泥の塔より、ハヌ勢ひ、うつ旋、一殿も  
其塔也。おどバと云々。是亦  
其指揮を熟考す。

之も、彼小のが、小上川南郊より流き

大原也衣川古和泉の隊と免ぐり

中

康衡あらえを近ハ衣川の軍と並びて畠中  
ぬれりとアリケドり も彼ハ我歴もあらの歴にて今も  
乃跡と小松と植木と草と遺に近きには地より祖のみの碑と建  
夏子や其經典をほくせんとせんと云北上川のちもすれず  
南郊と奥州のうちもくは恒秋内山瑞も南歴度の領知く  
衣川ハ夢井郡衣川昇兵ありとあら古御跡あり さのふ半も  
まぬ子々々をハこうも川すせのゆくらむけのわくもんと云  
あり而して名手みや赤羽は川乃やの赤と云ふと云ふと云  
我死キ と云下のねりと和泉が隊ハ和泉と云つた所と云  
云康衡ハ秀衡の次男伴基次郎を云赤と云ふと云ふと云  
也とぬせぐハ報夷ノ敵と云ぐあり 一方ハ北伐のうち及び移  
因は難のきよどく報夷を撃あリ由白石生ノ報夷  
志みアリアリの義經追討ノフ 或説ニ云秀衡病テ將ニ

死ニトスル片竊ニ三子ニ遺言レテ云鎌倉將軍ハ人  
トナリ賴レゲナレ當義經ヲハサレ、且我所領ヲモ奪ン  
ノ志アリト見ニ然ニ我カク存命テ在故ニイダギ手  
ヲ出アタハス我死バ必鎌倉ヨリ義經ヲ討ベレ左  
アラバ汝等ガ身モ亦危カルベレ所詮我死後ニ至リ  
國衡錦戸太郎康衡伊達次郎ハ佯テ鎌倉ニ屬シ義經ノ討手ヲ願ベ  
レ忠衡和泉三郎ハ義經ニ從テ權ニ是ヲ拒ギ義經及ビ義經  
ノ近臣ノ功アル者ヲバ皆鰐夷ヘ奔レムベレト囁付  
テ秀衡死ヌ果テ幾許モナク鎌倉ヨリ義經追伐ノ聞  
アリ是ニ於テ三子ヨク父ノ遺命ヲ守リ國衡康衡ハ  
高館ヲ攻、忠衡ハ義經ニ代自殺レテ焼死レ人ニシテ  
アリテ戰死セレメ義經ヲバ近臣ト俱ニ鰐夷へ送ル其  
形ヲ知メズ近臣龜井片岡辨慶カ徒ヲモ亦各人ヲ  
代テ戰死セレメ義經ヲバ近臣ト俱ニ鰐夷へ送ル其  
後國衡康衡兄弟モ亦終井賴朝ノ爲ニハサル義經ヲ  
義行ト更メ仕テ列矣トナリ義行王ト稱ズト云リ按  
鰐夷ニテハギクルミト云後ニ義經中華へ渡リ名ヲ  
者源廷尉義經也東部有廷尉居止之墟土人最好勇東

中皆畏之夷俗凡飲食乃祝之曰才キクル之間之則曰  
判官判官蓋所謂才キグルニ夷中所稱廷尉之言也又  
云西部地名亦有辨慶崎者或傳廷尉去此而踰北海云  
又東都俳士玄武房予ニ語テ云今ノ中華ハ韃靼人ノ  
治ニテ世ヲ清ト云其先ハ義經ヲ祖トス故ニ世號王  
亦清和源氏ノ清ヲ取ト乃清朝ニテ撰述セシ圖書太  
成ト云書ニ載スト聞又ト聞按ズルニ今清朝王城十戸戸  
義經ノ画像ヲ門柱ニ粘フ鰐夷志ニ見テ玄武房ノ談  
ト符合義經高館ニ死セズ鰐夷ヲ經  
テ中華ニ渡ルハ實ニシテ明ナリ

功名一時の叢書とある。國破主の山の主城

選古詩去者日以疎生者日以親出郭門直視但見丘與  
墳古墓犁鳥田松柏推爲薪白楊多悲風蕭蕭愁殺人思  
還故里閭欲歸道無因ト云モノト暗ニ韻顛  
スルガ如レ文ヲ嗜ム者ヨク心ヲ付ベシ

経堂ハニ將の像と云ニテ光堂ハニ代乃根成  
御免ニシムの佛と安道す中七章又シテ

中陰ノ頬廢を虚の叢とあるが此と是等を

諸山の多とあるあり珍宝ハあり得也御堂本界者之の  
丸光堂ハ金色堂と云ふ也歟三代ハ清衡奉御秀樹あり二室の  
佛と安置也とハ前より大堂破壊してはもと本堂と光明堂を  
うち一稱一室と云ふ也——源氏一統志より云清衡ニ名の  
像と蓮華小像とめぐら美とあすのありりしる像也眼半人  
玉城入江是日平かく玉服を履けりと七寶ハ法苑珠林  
云長阿含經云一金輪寶二白象寶三紺馬寶四神珠寶  
五玉女寶六居士寶七主兵寶又或說二琉璃玻璃碑碟

也。とくにけで舍てかねじる者の中の主は、小の主もとす。  
今もあらへて、木根本木の根から、いわゆる、のちの  
まへたる人の木根本木の根から、いわゆる、のちの  
そひとはばくの入もとひむじがくせんす所を、小くらう、  
の小ちほせり人入もとひむじがくせんす所を、小くらう、  
ぬる木もとひむじがくせんす所を、小くらう、  
ぬる木もとひむじがくせんす所を、小くらう、  
ぬる木もとひむじがくせんす所を、小くらう、  
ぬる木もとひむじがくせんす所を、小くらう、

庄ニムナシト訓ズ  
ト訓ズ空虚ハ二字

碼碯珊瑚珠七寶トス或ハ真珠ヲ除テ金銀  
ヲ加ル説モアリ法華普門品ヨリ出カ  
ト訓ズ不敵ノ意ニテ史記ニ高山老々ア

楊信爲人剛直屈強ト云是也  
ト云然バ屈強ノ字ヲ用ベシ屈強ハツヨキヲカム  
即ラ以テ最上トス按ルニ今俗健ナルヲクツキヤウ  
究竟の名者究竟ハサカヒツキワムト訓ズ俗ノ  
ヲ云舍ハ左傳丁宿曰金ド一夜ド一ノフナリ  
傳杜預註典封疆者ト封ハサカヒト訓ズ封人ハ境守  
也云侍封人ハ周禮掌設玉之社墳爲畿禁而樹之左  
也ト奥州やより別列新名の易形とふれど云  
今那戸前半城役乃より君の姓と拂とし、半云  
後半の姓と拂とし、本氏の姓あり湯湯ハ源の川の所ある  
命其の姓と拂とし、本氏の姓あり拂とし、半云  
ト向奥州やより別列新名の易形とふれど云  
也ト云侍封人ハ周禮掌設玉之社墳爲畿禁而樹之左  
傳杜預註典封疆者ト封ハサカヒト訓ズ封人ハ境守  
ヲ云舍ハ左傳丁宿曰金ド一夜ド一ノフナリ  
即ラ以テ最上トス按ルニ今俗健ナルヲクツキヤウ  
究竟の名者究竟ハサカヒツキワムト訓ズ俗ノ  
楊信爲人剛直屈強ト云是也

雪端少しうるゝ事にて界面上の所せ  
川 錘山説ニ鳥不鳴山更幽ト云風情ニテ深山ノ形容  
ナリおの下雪とは杉樹の葉乃ありトハ壹モ小らず  
れより是とト闇ト云雪端ト云々ハ杜甫詩已入風磴  
羅雲端ト云句ヲ取リ爾雅風而雨十日羅ト旋風ナド  
ノ土ヲ巻上テ降スヲ云巖上の處ハ古松蕭寥之勢あり  
今ハ村山歌云みち必不用の事ヨミ無きかくすま  
る所す 不用ハ不用ムトシテ山城も刀害とす故  
云々 患ハ爾雅憂也トス患十クハサワリナ  
クト云意ナリ○民間ノ説ニ古昔民ノ穴居セレキニ  
患ト云蟲アリテ人ヲ害ス故ニ人ノ安否ヲ問ニツ、  
ガナシヤト云ト按ルニ是患ト猶ト音通ナル故ニコ  
レヲ混誤レタル也猶ハ獸名ニテ神異經北方有獸焉  
其狀如獅子食人吹人則病名曰猶恒近人村裏入人居  
室百姓患者天帝徙之東方荒虫ト云是ナリ今民俗ノ

所謂モノハ正字通ニ風俗通ヲ引テ以患爲蟲人蟲善  
食人心トアリ或ハ此説ヨリ出ル然モ正字通ニ云  
モノハ唯猶ヲ通ジテ患ニ作ルノ  
ニ悉ノ字ノ本義ヲ解スルニ非ズ

尾ふ津フリ清風リシム者と云ひ清風もよほ名  
徳社ハ止みと仰と云ひ、うそハ富む力のうそどもあいや  
状ハ游祖ヨアリト、うそハ富む力のうそどもあいや  
一うそナは小うそ多うそのあうそ又ハ是世人乃安者哉  
篤戒の詞ありんや  
うそアリケンヤ

原一ナセモ少翁アリテ有する也

楊朱子林すれどソアリニ我何く少虫乃收ゆ  
ハ代玉少く周郎と云謂少虫也ト一又平東アリ  
卑俗アリバニ康をアリタリトキナヘキナリト云浮々  
と考ク少虫の少虫乃何と云クハ少虫乃時初

あれあや相列の御事とて東乃ね木屋と圓鏡は景  
あやゆく詠かみや歌はきよ其角の便所の附記す記

之もようひやつてのひの事

けうらもあ葉舟よ あく子もうひやうつよ あく桂  
ゑひつてうりそつりんとも下もがりともうる  
蛇をあひやまーとゆもあすきもととハナ桂  
君ひはくあり成多也も相くらやとハ春衣抄  
云六百多處を余後本つの制と云因をもる人山  
田の名を小あがへてのうち子姓とくゆを  
ゆ枝を拂ふとく又麻を去じとま云其下をなぐ  
書ふ室と個室と通すとけどり又旅宿ハ藝成  
とあるをう今もれの考證ふあすり万葉の方り  
船を廻りしやとばざり火至麻火屋ハ何生か秋  
いふくあいづと乃とみよ小の付会を日藝事  
女のありふよお小こきし男とほ小やまとぬ一多  
延と角と人目とあひ若るを海舟ト藝と西手  
せも亦け候あり

とくたてうあよすれぞうく 例とくよハ思慕  
情とかう一筆くわく取所の近接にむづく  
りとく尾ふ次のきハ聲と多く相不るもバキ  
況う一筆も阿レ此をかうす相合とくよ拂う  
ぬあすりとくよも華艶のるなり  
見かくとくよ本枝いふくゆと

すゆもとと付うてあ移の事

中もとれハよふ乃名卑俗を念よと云ひ  
之乃經敷あり拂すタナ肩を拂たり婦人  
の化粧と拂す具とく大女郎小女郎を拂う  
けふのうち見よ拂うるか居名ひくはる  
ふる物のも乃右合  
セモ亦け候あり

壁洞古昔人ハ古代のすゑが

碧と仰ふあらうくのねるひく婦女  
樂小波とゆくするト洪雲とづけを津ト

金輪も萬葉の民より始一からより  
御の御ハ神代より御より也其紀ニテアリ

山政領中立石寺とソノ山す御山也。慈覺大師

のアキラ屋より承清不乃地之山也。義光郡の地トモ  
今後上郡と云ハサ山形の山あり。其上ノ山の傍より山を立  
村山也。高上川の東乃山あり。禁篋の里。比山也。付と云。今ハ古也。  
あれ立石寺ハ、古玉百石と領一。武列の東。獻山也。居す。慈光  
大徳入定。付は北也。云ゆ中よ。慈光行持。多く。善也。くの奇  
石。ひりて。孤景乃也。ある。慈光大源ハ名也。圓仁と云。元  
亨釋書云。釋圓仁姓。壬生氏。野之下州都賀郡人。延暦十  
三年生焉。九歳而事同郡太慈寺僧廣智。年十五師傳教  
年二十三於和州東太寺受具足戒。承和五年從遣唐使  
藤常嗣入唐。十四年歸朝。仁壽四年四月住獻山座主貞  
觀六年正月十四日寂。年七十二。八年賜謚。慈覺大師。○  
山寺ノ里民相傳。慈覺大師ノ手ニ惡理アリ。俗ニ弓箭  
人云。是脛理アル者ハ必刃傷ノ難ニ遭ト故シ。以テ大

師常ニユレヲ畏慎、玉フ果シテ立石寺ニ入定ノ後、獻  
山ト葬處ノ巣起リ、獻山ヨリ衆徒凡來リ終ニ太師ノ  
頸ヲ斬テ獻山松柏也。柏ハ柏ノ俗字ニテ今俗柏ヲ  
ヘ持歸ルト云。柏<sup>訓スルハ尤誤ナリ</sup>日本ニテハ檜ノ木也。或ハアヌ一  
類多シ本草綱目ニ詳ナリ。ラフノ木ナリ。庄云テイテ、<sup>下ニシルス</sup>中華ノ柏ハ種  
說ニ柏ノ字ヲ又カヤト訓ズルハ誤ナリ。カ卫ト訓ズ  
ベレ<sup>乃指也</sup><sub>和訓也</sub>力卫又木ノ略ニテ此木ハ秋ニ至テモ色ヲ  
易ガル故也。カヤハカヤリ木ノ略ニテ榧ノ字ヲ用ユ  
此木ヲ蚊ヤリト云。岸と毛矢木也。俗云モ  
スル故ナリト云。若メ久不見也。

とハ塔内大比山子経因多ヒアヒト云ニ所ノ岩壁張キテ  
トトを仰ギテシト較少多シシカニシモトアシタリテ  
シトスカ、脇固ムリリトサムケテ岩の雪石の塊トシテナリト  
シテ至り者トモアヒトハ左乃山乃山也。天狗岩トシテ名  
シテ一き大岩直立す是トシテ是ハ御神氣無石と十方をもつ  
也。石面清々シホークアモウツル。御宿トシテ。俗ニ四ア

やくをくのぐるべー閣ハ正字通ニ横觀也トス佛殿ノ巍  
巍タルヲ稱スルノ名ナルベシ寂寢ハ二字庄ニサビ  
シ庄レヅカ庄訓ズ法華經方便品寂寢無人聲ト  
アリ俗ノレシシくトスルト云意物靜ナルフナリ

### 閑さや空すもみ入ばのあ

ソホーのあらん高上林崎海の盡中とふ他士山  
山やよぬ乃城と葉き比經冊と埋て草木と名づく

高上川のんと大石田と云ふ日あと高上川  
おうと川ハ村々の中央と流る名すとさす大石田と村  
山郡のうち山と川の東名町場おつきとしを祓つて西より  
秋田潟田ちどり川と庵ふ次もとと大石田と二所三所付  
ハ大石田の川向ひ引ひとまはりとて下くみく餘修あれ  
附源小サ戸角一あとのんとたつざす故山とすると  
あはれサ戸角一あとのんとたつざす故山とすると  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋

とハヤシル一あと

芦ハ蘆の謡裏

ゆづと川ハみちのくよりゆく山がと水と  
すごんもあゆさあどゑとひくと経不  
ありね敷山みかと流く深ハ源田のあよ  
入高上川ハ向ふ井浦とうやむちのくよりゆく山  
入形とみ上とあひだのハは川と云ふとあひて源川もゆくと  
川よおとくぬ大河ふく上方上原乃うち源にとあ村のあひだの  
高上川入井浦ハ川下よりやくなくいのきと炎柱ありて其  
上井浦とあひだのあゆ人のえ小時のをとてのくはあく  
やくれやくぬかず一こさんとやゆさハ井浦のくもよる  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋

翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋

翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋  
翁と云ふとあづく葉せ葉と云胡圓と夫秋

もしくと云ふ事よりは連源寺も少勞すくとも多く隼人  
あすのる一が中學を有り前後も大石田より上り下り列  
てゐる所とハラルト所中も大難不遇とは候時のみとてども未の  
期より來ハ船とあらずと云候事なり山に於より秋田ば恆  
き一リは遠方にと清川とづか舟のやまとまつてあるま  
ものくふちのよひてハ乃夜もさか夜も日と候事つむりを承  
風田ハ天の岩戸の靈酒井處の以下海をよく  
言上をめれ事と不似より其の處の湊あり左右山麓ひ  
蘭の中よ船とらずとよ船とくとくとやいは  
みといふか一白糸お御りす葉乃藻くよ  
爲く仙人坐昇るよ降り立みるよざくくかあ  
や一 略上大石田より北國へゆるとハ皆山嶺あるく山中と  
りの川原もとてりあすやうち山を度ひ蘭の  
中よ形とわまとゆり縞糸ハ天子の御み川のりとハくすねいか  
あめいふふとゆす此身をうりゆくゆくゆくはをね  
リトと仙人が御と云く是亦難云  
かく以然くああやくとある

見と古てよのちかく仙人坐と常陸房あれとやることより  
海ねハ義姫のほふく義姫あめとせじのは才延さること何一  
種ア仙湖とゆくも生すをきれど常良姫のうまと徑也  
してわく人のうるうらひ五や民家の口被そ千利多と云  
リトと仙人が御と云く是亦難云  
かく以然くああやくとある

西風のとあくめです  
三義上川

せきゆくすひ

六月、吉洞黒山よりの國日吉と云者と云て  
別當代金堂及び閣堂より得す南面のぶ院小  
金一と號號せむこあやのふゆすとて  
月山の仲後年とて内侍方ふあやと云たまハ能名高丸と云は  
京師ゑく死一翁乃ち西ノアツレハ故乃すとて

中僧車來云阿闍梨、或ハ呂九庄見タリ阿闍梨ハ釋氏要覽云寄歸傳曰、阿遮梨那唐言軌範資糧論曰阿遮梨夜隨言正行社中僧車來云阿闍梨ハ具ニハ都法大阿闍梨ト云天台真言兩宗ニ限ル三部ノ密教相承ノ師名ナリト謁ハ玉篇告也白也又請見也ト云申入テ對面スルフナリ南谷ハ羽黒山中ニアル谷ノ名北谷中谷南谷ナド云テ坊舍ノアル處ナリ憐愍ハ二字庄ニアワレムト訓ズ涅槃經憐愍一切衆生ト云リ

有事やあとうりすある

シタトドモハテモ事のあつてありは小有若と改む  
蓋也自南東ヨリ云洛乃ミトヨムハ夏鳥セヤ  
アリトキタガービウカクモ

お仙らり御縁千葉一

別版五は權現ニ諸當山閑關被除大师ハいづきの代乃人トテモ其あらず近在式小田別里山の神社と有

畠鳥の毛羽と以國は貢と故よと風云記す侍

トキノ人羽黒山ハ祭神倉翁之神命推古天皇元年當國出現ニ一山開基能除大師一說ニ大師ハ乃推古天皇ノ皇子ト云奉敕嗣役行者開之ト云延喜式ハ五十卷アリ律令ノ書ニテ延喜年中右大臣忠平勅ヲ奉テコレヲ撰ズ風土記ハ諸國ノ土地人民產物等ノヲヲ記ス書ナリ和銅年中令撰諸國風土記ト云今モ此國ヨリ鷺羽ナトヲ多ク出

月山乃々と今之ニ山とす當寺亥江東歟  
屬トテ天名止祝の月明らかに國を聽通

乃法寺灯、中畠山天塊の驗効乃法寺灯、中畠山天塊の驗効

人貴也<sub>ト</sub>湯殿<sub>ト</sub>月山ハ羽黒山湯殿山ノ峯ナリ乃羽黒人貴也<sub>ト</sub>湯殿兩山ノ奥院ニテ開基羽黒山ニ同ジ湯殿山ハ大日ノ靈場ニテ開基役行者ト云未詳但月山西ノ中腹庄内ノ方ナルハ羽黒山東ノ中腹竇上ノ

方ナルハ湯殿山ナリ故ニ此山ニ一山一體ト云或江東  
歟ハ武列江戸より東歟山とソムシテ天台止觀とハ止觀ハ  
觀法ノヲニテ天台一家ノ旨トスル所三十大部ノ中ニモ  
摩軒止觀アリ釋文句三十卷ハ法華經ノ注解ニテ玄義十卷ハ題号ラ  
三太部解ニテ摩軒止觀十卷ハ觀法ヲ述  
頗ハ八教中ノ圓教頗教ヲ云是亦天台一家宗ノ尚所融  
通ハ二字氏ニトヲルト訓ズ此ヨリ彼ニ通ジ彼ヨリ  
此ニ通ズルノ義圓教頗教互ニ通達スルヲ云法の灯  
トハ燈ハ光輝アリテイツニテモ傳ルモノ故ニ佛法  
ノ明ニ世世傳リテ滅セザルヲ喻フ詩ニモ一點燈光  
續續傳ト云リ禪書ニモ傳燈錄ノ名アリ靈山ハ天竺  
靈鷲山ヲ云釋尊說法ノ地ナリ驗効ハ皆  
シルシト訓ズ俗ニケンノ有ト云トナリ

ああああああああううけ寶冠よびと包彌がと  
いふすのよんじりりとて中  
入のとあゆナレ中  
累はく月歌るトシムカクシマタ  
トシムカクシマタハ累蔚歌りセ

ざれハゆるゆすあゆるがめハ孤獨玉てあすれ修祐笠巣ニあ山一かくる人  
際齋中よりトソドモ足と被ふ樹るけあゆ下トシムカクシマタ及ひ旅宿涉感蓋  
坐をと後子翁はつ人性茲坊小僧トシムカクシマタ予擇列修持小學附  
属トシムカクシマタ千山の子宮風園塔住山宗風庭坐と送ち一以謂及並小燈  
哉坊の作爲翁翁本像と幼ひ室冠ハ公記布るく形と包すと  
云強力ハ頃翁乃キ才ふ爰を負ひてほりむらの別トシムカクシマタ口乃葉  
内生毛トシムカクシマタとあくナ亦先達と云日暮引きのすゝ穿よ入とハ詩ニ  
平歩入雲霄と云ぶやくもひのびる正處とおう哉もくくの喰  
小雲閣ハ道院の從小天ト上六關をどきりトシムカクシマタ役ハ  
ラツル凡シツム氏訓ズ日没ハ日ノ入トニテ佛家ノ  
六時二日一沒時

アリ晩暮ヲ云

翁の傍よ廻游少念トシムカクシマタ中彼龍象小刻成  
渾トスともや千將莫耶々むのうトシムカクシマタとぞとぞとぞとぞとぞとぞ  
能の物あきこりぬりあくトシムカクシマタ小也う廻游ハ本字鐵  
右ニテタンヤ

ト讀ヘシ和俗瑕治ノ字ト混ジテ其音ヲ繆ナリ月山  
ノ鍛冶小屋ハ今其業ヲナス者ナク唯名ノニ遺リテ  
道者ノ舍トナルノニ猶有子利と渾とハ史記荀卿傳  
注晉太康地理記云汝南西平縣有龍淵水可用渾刀劍  
トアリ渾ハ俗ニ云水ギタヒノフナリ干將莫耶ハ古  
鍛冶ノ名工ノ名吳越春秋云干將吳人也與歐冶子同  
師闔閭使造二劍一曰干將二曰莫耶莫耶者干將之妻  
也金鐵未流于將夫妻乃斷髮剪指投於爐中乃濡遂烏  
劍陽干將作龜文陰莫耶作繩理干將匿其陽出陰以獻  
闔閭太平廣記云干將莫耶劍皆以銅鑄之非鐵也ト云  
協解ハ二字庄ニタユルト訓ススクル、フニテ  
俗ノ上手ト云巧者ト云力如レ孰ハ執心ナリ  
矣乙

の梅を貰ふ。わが家のへくら必在文行所  
あるぞ。赤考。

行尊ハ元京釋書云諫議大夫

年任延暦寺座主長承三年勅爲衆僧上座ト僧正ハ日  
本ノ僧爵ナリ行基ヨリ始ル身の氣とハ空無事大覺する  
もひしきす揚の聲りゆきと云くトモ可也りつともか  
られと又一山仰々しよりかある人を第一りる。妙學山  
中の微細利者の法式とて他もあらず。か縛ば  
微細とハ微ハ玉篇細也不明也ト云目ニモ見ヌホ  
ドノ至テコニカナルヲ云法式ハ法度式自ナリ

少々山中を歩みて、洞へ入  
る。山中は清々として、一筋の光が見えぬ。洞は、  
左側に石室あり、その奥に、金銀の小石の如き散らち  
て、其の上を往来する人

根元と立ての版  
鷹の巣乃塚下長山氏重りと云ひゆく故の名也ト  
もづくにて謫居一事ありナムシ附  
詠み地す中御  
署御庵石室

と云醫師の名と有りす 粉が粉と相州田郡より多く湯井  
車多と伊豆玄以と云開多ハ號也又ハ地名トモ内  
小佐す田代と他海部の地名トモヤク其の地名

何うもやく時海の多くタすれ

け向ハ神めくらのゆある。酒因の城前  
上川宿乃下神形、お湯渡りゆまと神乃  
浦と云名す。くたまえ。ひつじの神のう  
とを十里ばかりあらわより越後へ出む。酒道より  
ゆと云御所來け東の山際、千疊あけゆと云  
神と湯あつみとよし上乃山城ゆと山と称す。以  
あつてハ前ども温泉と書湯あつみより温泉流  
しうみとある。そのづの温泉ゆと古の名と云浦  
ハ神めくらのゆ。七里下川、秋田湯足村。浦あり  
多羅浦も。浦乃浦とア渡す。浦乃浦山北  
のゆと云。一派からうよが浦。あみと海ゆ  
本くら浦。浦ノ口。酒道奈良の浦。一里引つきよゆ  
本くら浦。浦ノ口。酒道奈良の浦。一里引つきよゆ

とての所合を考へて實在居一以  
て小も付かぬて附書奉申

蜀道之难也如海入太行上川

學の又上玉の事序（さとしも実ゆれば）あ川さゆと  
改りてすむる爲めにへんりゆ因もの爲めに他をゆく  
鳥りかの友の友の（是れは併存）換する子けの玉をす  
常さまとすをあへんりゆくハ物の神を神多て換寂乃  
ゆからはうへぬく推教乃ね思

江山の清の風光數を数えて今來游子の

すば夷 風光ハ風景より曰三體誅今日風光君不見ト  
アリ象鷲も并列由利郡ト左は木十景の一つ  
ちりて苗山オ一ノ名下佐景の地八十八里力半九尋所りと  
之傳より江のうらちまさよれより有ふひきこと云と和名あり  
又蝶鷲を云隕ハ小きカサブリの殻ス以る貝より雲東の小兒が處  
とあり云々さごとくわ是有り上りのうらハ江面く波しきや

うじく辨あとの生ずれのあれどもうと名づけ得るあり  
と辨する  
正字と本字を下平洋ナリ 江中の島をわゆふと云ふと  
いふと云ふとあり、のうすゞと棹と舟の腰ともす。すか一尾  
ス一枚のくちらにて西湖も大舟と若きりぬ。さへ傍遊人  
乃かのくとす。江と日と月と風と水と波と一丈八寸ハ玉ト  
一寸四方ヲ云。醫書ニ方寸也。假テ此少ノ義ニ用ユスコニト史  
記鄒陽傳願借玉階方寸之地ト云。三體詩楚國千里遠  
孰知方寸。違ト云類ニテ多ク土地ナドヲ度量スルニ  
用ユ責ハ争ト云意ニテメニ矣。汝云すとまえとハ雨猿  
もぐくの旅詠りもやれ先もぬ。もろかもと云ふとハ雨猿  
勝ト云む山のくの間中ニ英化一とて

も又奇やとば而ほの勝と云又妙母也と云  
の名を猶といひ。雨縫紙とてとひ詩樓閣朦朧細  
活法。日昧明也ト云物ノラボロニ見ルトナリ鳥海山  
モ由利郡乃象鴻ノ上ノ山ニテ高月山ト韻頃ス四時

雪アリ祭神羽黒山ニ同じ大物忌太神ト稱ス當國ノ  
一宮ナリ園中ニ英化してハ按ルニ莫作ハ摹揀ノ誤ナ  
ルベレ<sub>通シテ</sub>舉世說新語補暗中摹索亦可識トアリ卑俗  
ノクラガリニテサグツテ見テモ知ルト云トナリ此  
ニテハ唯闇中ニ坐シテソコラアタリノ知カヌル形  
容ト見ベレシ而も又奇也とぞばるは乃時々又毛のり一  
東坡西湖詩水光潋滟晴方好山色空蒙雨亦奇欲把西  
湖比<sub>中</sub>西子淡粧濃抹也相宜ド此詩ヲ取ルナリ此詩ハ  
是本朝ニテハ必象鴻ノ形容ナルベレ故ニ祖翁モ亦  
象鴻眺望ノ吟ニ西施ガ睡ル形容ヲ云ントテ先僅其意  
ヲ起ス是漢文ニモ貴所ニテ文書ニモ此法アリ亦吾  
翁ノ文ニ奇中ノ妙ナルモノナリ吾の名を不繕と入  
くとハ少食のつめを中止す。生焉<sub>ねね</sub>はと云蜜ハモト外  
夷國名ニテ蜜蠻ト云常ニ船ニ居海物ヲ取テ世業ト  
ス故ニ日本ニテ蜜ノ字ヲ海人ノ通稱ニ用ユ固<sub>ナリ</sub>象鴻  
ニ蜜ノ宿屋ヲ詠ル歌多シ<sub>ねね</sub>世の中ハア<sub>ア</sub>ても乞<sub>ア</sub>さざ  
のあぬ乃ちやとわざをやて<sub>ア</sub>。御<sub>ア</sub>まほら<sub>ア</sub>やつのオア<sub>ア</sub>あ  
きさかくやわぬ乃の宿屋<sub>ア</sub>あやま<sub>ア</sub>か<sub>ア</sub>原故<sub>ア</sub>仲胡<sub>ア</sub>方角<sub>ア</sub>象<sub>ア</sub>蜜<sub>ア</sub>や

シテハ陶潛歸去來辭審容膝之易安也云文ヲ取也  
色あれどもひ能因安下向のるを禁乎予は甚もすむ  
はまくとも訊のまふの上ニシテトキテ樹乃老木の  
り法師乃紀念とのノすふのう一あぐーとゆ生一樹も干  
ヌゆ西一キ一せくあり方不ハ枯く今ハ芳木ありめりの御子  
テさうこ乃様ハ波ふうり生て太風の上こくあぬぢうり、ホ  
西行ハ和漢三才圖會云俗名佐藤兵部衛尉藤原憲清秀  
鄉九世孫武衛校尉藤原康清之子也達弓馬羽目皆善  
和歌出於奥州奉仕鳥羽法皇爲北面衛士然有避世心  
遂出家號圓位後名西行建久四年二月十五日寂紀云  
のうらあひアカマトリ○象は一丈の身乃年甲丙和二年常  
州ゆ戸のうらゆもゆと不仇士母お浮下多リ申候一モス文心一  
ホ代ちモイモ人浮ノ一スカニ其便スリテ長途ガ所の費  
とまく夙夜勤すがし奉少々ナク賛一世のノリてさり

えちと千満珠寺と云 神功皇后ハ人皇十四代  
ノ母君ニテ氣長足姫ト號ス千満珠寺ハ又于満寺ト  
云或ハ蝶滿寺尼書禪宗ニテ千體佛ヲ安置ス山門ナ  
ド有テ莊嚴巍巍タリ○按ルニ此寺蝶瀉ノホトリニ  
在故ニ本蝶滿寺ト號シタルヲイツノ程ニ力干満ト  
書改終ニ好事者神功皇后三韓征伐ノ片ニ千珠満珠  
ノ兩顆ヲ齎玉ヘルヲ傳會シテ千満ノ下ニ珠ノ字  
ヲ加ヘ寺號トナレ或ハ此兩珠ヲ此地ニ埋玉フト云  
里人說又皇后ノ御陵ヲモ造立シケルニヤ既ニコヽノ  
汝越川中ニ烏帽子岩ト云石アリテ蕉翁行脚ノ時ニ  
トザレ歌ノ詠アリシニ其後此石ヲ蝶滿寺ノ庭上ヘ  
移レテ親鸞上人ノ腰掛石ト名クト里人ノ談ヲ聞又  
其石今猶寺庭ニ存レ傍ニ樹レテ親鸞腰掛石ト云  
云皇后ノ御陵モ亦或ハ此類ノ虛妄ナルベシ せむ

の方丈より一丈と幅ハ方丈ハ寺ノ勝手向

間ヲ云釋氏要覽云唐

顯慶二年王玄策使西域至毗耶離城有羅摩居士石室

以半板笏ヲ縱横量之得十笏故僧室名方丈室ト笏ハ日本

コナリ本十尺ヲ度トス日本ノ半板ヲアリト十笏ハ一丈ナリ右

室ノ縱横一丈ツ、アリレ故ニ方丈ト云一丈四傍ト名と

携バとは王勃、滕王閣、誌朱簾

暮捲西山雨ト云ル形容ナリ其後、アリテ云ハ

幕捲西山雨ト云ル形容ナリ其後、アリテ云ハ

幕捲西山雨ト云ル形容ナリ其後、アリテ云ハ

字の事無

あれば、一西ハもや／＼の穿と謂イ

もや／＼の穿

の穿と謂イ、又曰く、西ハス、もや／＼

の穿

さ入サ、もや／＼すれど、西ハス、もや／＼、或ナシ也、

の穿と爲する、或說、西ハス、もや／＼のむや／＼の穿

と、もや／＼すれど、西ハス、もや／＼せど、もや／＼人を

もや／＼すれど、西ハス、もや／＼せど、もや／＼人を

けタト、あ旅のまち入、前ふり、あれす又不續雙  
魚見道旁雨中花彷彿湘城面上啼痕ト亦

けりみありが  
トセド

## 波城や松はきぬ生の海流一

ゆる森お自草今以成町に波の小のうを  
五のまゆ海がくやとまちな川の川のまゆ海  
ぞれとまゆ海のうおより塔乃下り店  
みれとアヤマツの事と云傳ふ

酒田の余波はと重て其壁のまよ望 余波のまよ  
とひを被城前か契候か 加契の事まで百世里とゆく酒の  
城中城は佐渡の七ふさを 加賀の府ハ金源と云前の酒ハ成ね山野院院  
の算とこゆルハタリ本農改ハ成はの地もとけ下山の山の山代酒  
きと付石のち古のうちハ皆荒れけ保とひうあたれつむを  
あけ鳥羽の今の算は出れ乃地にてやまの隣を荒れ天と云  
一がりは算山と云る 一がりハ一振と半城後御中の後 置温

代格持持ホーでも因度持も異を

## の弟よ神とふやぬ一病おうりてゆまともよば

神ハ難神と云城ねる因少く醫治のりと高ターテもやうトシル  
坐るの河口せはくと東だ一其時のとく治源ヒヨウジン小もくす○は  
たるおののきとくアヤマツハ遠よ病けおこすのと小あうで  
かあうじゆへ向れ事一々此種うる東もと中急治より城はの  
玉へ出立と在田乃抱すと東一そ一ち西とハ叶ひて治て是方乃  
事とあう時ハミ又宣後ミツシヤウ一々苦ース城後おうらす、お急  
うりてかく走ぬく古歌焉地ありとく「ども行至も風聲並み  
ぬをきとくのからびはかはれ未だ見ゆるがく風雨の先れ  
のく勇れ乃波奈佳境燒キつとんする何とくとくとくあべき  
や旦年角の波子なりの長く一かくす事成るせてかくも  
ちがきやすれ一車と一星赤道の紀元一神

あんとや物事のくとくと附縁りゆわふ

## よ身や立ちも第の根よハ心す

ササ城を松城今町植候  
ちふと酒手本附縁りゆわふ

若海や佐渡より之をもてて  
大河

是も今町の所ありと云はばの町、今町を  
西より北へ二十里を走りんが、  
海上より博志、博物志、天河與海通詩銀  
橋、横アリて月の橋アリハ天井川也  
は、タマリ、アリキテ、アリシテ、アリ

今ハ親一すみもん大りて游行ちゆく  
北國一の種也と誠く親ももぞみーすハ哉は乃  
み性をもて山の下と云一方も喰山より其下み波打ざハと活  
ますか千波の本舟ハ岩井路より走りと義ハれて走る水  
を波のむく方アゲラノうちと走る也ハ小親ともりて走る事  
もばく云ひて學名有り大ヒジカハ中空有り走る事有  
布との音をもとと岩石也者と云ふ事有リ岩渕有  
あとさかね者に傳せれ哉や乃は走海を走り誠ほのま

新井  
ガタ

新宿と云ふの遊女城一便勝く參るもするト  
新宿と云ふのは蒲原郡あきは町協和ノ傳瀧川度川<sub>竹列子ハ禁</sub>  
金魚の大河彦公室と仕役トシヨウとあ國第一大原大湊<sub>タツノマツノホリ</sub>の地ちうり  
艳女ハ中華ニテハ妓ト云日本ニテ清盛ノ片ニ妓生妓女ト云自宿子ノ名ハ是ニヨルノ稱ナリ書言故事  
古未有妓漢武始置官妓待軍士之無妻者ト云リ遊女  
ノ名ハ詩漢有遊女ノ詞ヨリ出タルカサレ庄詩ノ義  
ハ唯漢水ノ邊ヲ遊行スル女ヲ云妓婦ノフニハ非ズ  
日本ニテハ播州室津ノ遊女ヲ始トスト云或ハ周防  
國室積ノ妓始ナリ庄云又朝野群載云江口則觀音爲  
祖蟹嶋則宮城爲宗神崎則河童姬爲長者ト然庄何レ  
ノ代ナルフヲ云ズ又或書云五吾朝ノ妓ハ何レノ世ヨ  
リ起シヤ知ズ大抵鳥羽院ノ御宇ニ始レトイヘ庄後  
拾遺和歌集ニ遊女宮城ガ歌ヲ載源氏開屋卷ニハ光  
源氏住吉ヘ詣玉フ行裝ヲ江口神崎ノ遊女船ニ浮テ  
見奉レシフヲ記ス然バ後一條院比既ニ遊女有レカ又  
萬葉集ニ遊行婦女ト云モノアリテ遊女ノヤウニモ  
聞レバ孝謙ノ御宇ニモ有レニヤ又鳥羽院ノ御宇永

久三年洛陽ニ嶋千歳和歌前ト云二人ノ女盛ニ教坊  
舞ヲナシテ遊女ノ舞是ヨリ始ルト年代廣記ニシル  
レ前太平記ニ藤原正澄ガ妓女松世ト云ルヲ兄澄友  
ガ奪シコト載ス又一説ニハ鳥羽院ノ御宇通憲入道  
ガ妾儀禪師ニ烏帽子水平ヲ著セ太刀ヲ帶セ舞シヌ  
是ヲ男舞ト稱ズ是遊女ノ舞ノ始ナリト源平盛衰記  
ニ見タリト云按ズルニ新古今集ニカ遊女奥州ト云  
者ノ歌ヲ載タリト覺ニ何レニモ其始ハ年舊キトニ  
コソ又傾城ノ號ハ前漢書外戚傳云李延年妹絕美延  
年侍上酒醉歌曰北方有佳人絕世而獨立顧傾人城  
再顧傾人國不惜城與國佳人難再得ト此歌ヨリシテ  
美人ヲ傾城傾國ト云後終ニ妓ノ稱トナル伊勢守之子也  
太神ヘ參詣スルヲ云内宮ハ天照皇太神ニテ宇治郡  
御裳濯川ノ上ニ在ス外宮ハ豐受皇太神ニテ度會郡  
山田原ニ在ス何レモ鎮座ハ牟白波の下す汀又  
仁天皇二十六年冬十月ト云

とをゆき、うの風のこの世をあくすくうらうる

中日の業因ひつづる。あとの手のけよせとす。あ  
あぬか子をされハ高もと先事人学ひとゆく。うれサノ名トモを  
ナキト一木をトアシカ。ハモチ。ゆくと後事あけゆすア  
きう拂する。み者のあみく者略也。前後せまくす。ひつづ方  
のこめセハ別ち。あ士乃子のきづケあり。業因ハ前世もくがー。も  
ウギと呼セ。アリあると云フ。ハカミ拙ノ字ニテ巧ト對用  
シ俗ノ下手ト云。ナリ日本ノ俗ニテハ古語拾遺ニ  
ヤツカレト訓ジ。民間ニモ亦拙者ナド、連  
用シテ多クイヤレト云。意卑下ノ辭ニ用コ  
か後うあく。す。善き。トア  
林得成此加護方便トア こう。四十八の院と加や累  
リ善ノ解ハ前ニシルス  
本の末乃加ねよ云  
橋井みかみ

和洋あとすの十八ヶ原ハト海原ア江邊より岩原東山と云ふを  
或も御やけ海を越へ乃ふもどへりて御城ノ所の幅一里半を  
其中を穿て通じて經所ありて古御城ハ皆御城村小郡の名所  
ヨリ故方の源ハ放生はと云溪町乃むと名万字角おハ本町と申す  
ニ御海の源乃くやひよ河すりみゆんと呼べ今や河すれ御水  
御水多也あがるのをと申ゆた二の二子川浦と有也傳也御色おえの町乃北布  
落の源はゆくもく布放つゝ今四とあれねきよのうめ底きくゆふ海ある  
とかさーてりん又人み半身入丸以赤おうとみとて今れあら者  
ゆうけ上原山大は志持の館乃詣あり○友人すもあらば洋よた  
ニハ接焉とすと云ふとすだ一接落ハ海汲桶の名はすまハあら  
あれハ接焉ゆく海とくも接焉とあらか手に接焉乃くと接  
焉ゆく浦とよろこ多古多胡みねるハ皆他名をあり接焉の田  
あの浦もとみの田ド有て續日本紀駿河國從五位下相原  
造東入等於部内盧原郡多枯浦濱獲黃金獻之モ然  
此バたこの浦ハ浦ゆ強所ともト仰れ乃  
字と曰ても苦一かくすとぞとぞとぞとぞ

ワセのゆつやを入方ハコと波海

ナキ源みと二井ミ一義ハ甚古板海と申て(ライノ假  
陸海の事名とす)亥立トヒモホトアリシムの  
トモリ一義ハ有根も書(或ハ主政の城)申村の  
邪小治の名前あり御令官の儀士書(或ハ主政の城)申  
此也お附と方せと云せすれある左不名接焉と云  
大湾めびりてつくりかこらる萬の山と申す  
凡の所よりおなじう事云者(或ハ主政の城)申  
乃山甚高上へきりやうと崎(或ハ主政の城)申  
カとま村の山(或ハ主政の城)申とぞうすとぞう  
大灣尾(或ハ主政の城)申とぞうすとぞう

伊の山くりの山の子と二つて やの山の山ハア  
或中源波敷(或ハ主政の城)の東(或ハ主政の城)源氏が事と云ひて本房義仲の  
事ありて義仲乃喜巴(或ハ主政の城)二人の協もけ何(或ハ主政の城)御  
の花山(或ハ主政の城)木(或ハ主政の城)の山(或ハ主政の城)山乃小山不(或ハ主政の城)  
く(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)の山(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)  
云くりう山ハ茂中(或ハ主政の城)石(或ハ主政の城)の山(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)  
りて(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)山(或ハ主政の城)  
ハ栗柄(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)  
栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)栗(或ハ主政の城)

之多ハ後主より本多源仲太支房等とて平定討伐の旨  
去とキテ久を猶びり一御神事ニシテ御子今より有り

小村とシカ

志のゆきと名や小李ゆく教す

小村と金はより八里むす小ね中砂と又沙  
立石の地す今と金源が成なり松毛乃  
西より船と成りしか次猪  
ト云々世人を産とす

比不太田の神社と海生寺の年祭の切あり  
姓者源氏と属す一時、我朝云よりもくとや  
中木と云々即ち状云ひて以れすにあへ  
ゆるより極々の次良の役と一云うすのやうり

源氏とみとす右田の御神事ハ後主より小村のあどり  
書齋藤別當ト號ス越前ニ生ル始ハ源義朝ニ屬シ後  
平宗盛ニ隨ヒ加州篠原ノ合戦ニ死ス出生ノ地ハ吾  
住丸岡ヨリ十町餘北ニ長崎ト云村アリ此地ニテ生ル  
ト云今直盛屋敷(今竹林トナル)産湯池ナド云蹟アリ篠原  
モ今村名トナル加州大聖寺驛ヨリ三里許西北ノ海  
邊ナリ村ノ西松林ノ中ニ真盛塚アリ其北入江ノ中  
ニ首洗池ノ蹟ト云アリ甲ハ本曾ノ字兜ノ字等ヲ用ヒ  
ベシ甲ハ鎧ヲ云(音ナリ)假和俗甲胄ノ二字ヲ顛倒シテ用ル  
久レ此カブトニ添テ真盛が鎧ノ草摺小牛臘當ア  
リ草摺ト小牛ハ尋常ノ如レ臘當ハ鐵ノノベツケニ  
テ蝴蝶アリ錦ノ帛ハ宗盛ヨリ真盛へ賜ル所ノ赤地  
錦直衣ノ切ナリ本ハ直衣ノ一ニテ義仲ヨリ奉納  
有レヨイツトナク切取レ由今ハ僅ニ縦二尺横一尺  
諸ノヨル織文ハ白底黃ナドニ金ヲ織テ雲文鳥文ア  
リ義朝ハ六條判官爲義子後白河院時ノ武將ニテ平  
治ノ亂ニ平家ト合戦シテ利アラズ終ニ敗北シ尾州

ニ落往野間内海ニテ家人長田庄司忠宗力爲ニ殺ル  
義仲ハ源爲義孫帶刀先生義賢子信州木曾ニ住ス因  
テ木曾冠者ト號ス始平家ヲ攻後賴朝ニ背キ江州栗  
津原ニテ自殺ス福口次郎名ハ兼光權頭兼遠ガ子今  
井四郎兼平ガ兄ニテ義仲ノ臣ノ中四天王ト稱スル  
モノ、一ナリ義仲真盛ガ調度ヲ當社ヘ奉納セし副  
書今ニ社藏トス源氏ハ縁起ト書ベシ其由縁ノ起ヲ云  
大日經從因縁起有心相生ト云リ上ニ云副書縁起凡

ニ附錄二  
セルス

むさんやか甲のトヒミテナ

けタハ詩十月蟋蟀入我牀下とあくと良ゆと  
ノイモサシムアシハ小豆もんやもみが  
おもろもんじりもんやと

山中之温泉よりかく白根の獄ゆゑにて

あゆむ中少ひの法らニ三十ニちの收れをよきを  
あひて後大慈大坐の像とある一ノ物ひく形

谷とも名付かずと云  
山中の温泉ハ大至る乃東の山中  
又が獄ハ白山也すと云々が獄城あの度ニとめ付名白山也す  
は名と云るところ名付名付白山也すと云々が獄城ある也す  
この名ハある事無く云る所也今ハ白山也と音字で呼ぶ也す山中  
称するハ加利子在に垂跡松原の早ちり町と名付と云々と東  
小社ありくちう山松原と名む又妙に移記と云元正天皇鹽  
龜二年白山權現出現山開基泰澄大師ナリ塔身ハ全  
はより口東の山原と是より白山へ城もそびり山のああ  
城あ大野郡小佐原すと云ふ山法皇ハ元亨釋書云安  
和帝長子諱師貞寛和二十年六月二十一中夜帝潛出宮  
位後納ニ二妃爲女御然皆不得叡顧聞恒子が大師言之容兒  
絶世納之爲妃寵遇甚厚弘徽殿女御是也無幾日寛和元

恒子薨去焉帝不堪哀愁自此怠朝政生棄世志落飾号  
入覺在位三年後行五幾內近國還洛トシ千ム不ム西ム巡  
神山山城大和河内和泉奈良紀伊丹波丹波攝鹿邊に並波  
若山山城大和河内和泉奈良紀伊丹波丹波攝鹿邊に並波  
十一ヶ小の御寺を参拝と巡るるムム記別名有山よりは列  
名山山城大和河内和泉奈良紀伊丹波丹波攝鹿邊に並波  
相傳華山法皇以有靈夢長德元年三月十七日始詣於  
六角堂爲初以那智當十一而與今次第不同ト又云  
熊野六月朔日至谷汲以此爲順禮之權輿按法皇順禮  
之事不載于史傳時熊野處處御參詣矣ト云リ○拙づく耶若  
ちハ往き立拂立拂とよほの少よりぬへへ一里をのり山を  
あり旅も勿論と自些石を割て竹とあら薪炭すがく丹青  
とれどもどうかあざやかとあら薪炭へおのじよ遊唐木を  
ちやに傍樹行りと上り山のハ拿達テの多と至ばまうとく尺  
波波は東の御里民山をくつて眼下小村画づぐく施築の  
地あり少當ハ二ヶ寺有り一と那谷那谷と云はれ在大是也次代甚  
玉院と云ひ也

石山の石より一叶の風

船出の御京石川より、石山より來。——石  
岩八幡山より、其名曝てふ。

泥水を洗すがい功より御千次と云  
泥水ハ山中の湯也  
大聖寺度の御也  
浴ハユアヒト訓ズシとつづくも之ハ者馬ノチ湯也  
立水のハ松列の泥水也トモ世人も云々アリと傳す

山中初葉ハ半ちぬ所の如

菊は廿二日をもかく見ゆることとて  
の後より爾雅云菊有紫莖氣香而味美者  
服之可已疾延年西京雜記云九月九日佩  
茱萸食餌飲菊花酒令人長壽張鼎志云茱  
萸曰辟邪翁菊曰延壽客列仙傳云彭祖服  
菊長壽其年七百餘歲ト有い医家の法と有  
ひととかくハヤドヤナルヒシテハ秋の事す  
多也あひきの者のものと傳へべし也

桃源うるハカラウラはる乃あ幸ひ  
苗引サムウマウリ御宿リヒル

阿ヤドシキアリ久米ニシテ中流みちのまを索  
のむアリキモアリ一比風雅子厚一サムウリ  
浜ヨリ西テ貞治の門ノ人トトありテサムウリ功名  
乃ハ一村判官の料ト清ズミシテ者ナムの御のまも  
茶シ少ハカガラトウシナトツテ附知ト妻一宇附義桃源  
名トあるト門人トモ多シト点を貞治セシハモトタクの御  
ヨリモトアリ風雅ハ皆のニ義乃アモニ二義ニシテ義ハ城は風  
雅則トモ学うち徳ヒ劍のシツハタタキセキトモアリ風雅則  
ウハ一ツの神トモアリ硕ハ其神ト称セラリシモ俗アレ  
照法ニ常トヨシヒ望ねるの御ハ風雅、志度の二ツ神トモアリ少  
詩歌連作のセビヒ風雅ヒシモトモアリ風雅トモ学ます  
ヒ風雅モアリト判官の料ト清ト御アリモアリ

伊勢の國トモ鷺ヒソアリモアリモ長治トモ  
川の毛アリヤアリハ由緒申縁所由所縁のまと  
羽エヘト訓ス佐ムトモアリホトモキトモアリ 集鳥の  
ウツル<sup>シテ</sup>云ヌアドリシハ<sup>シテ</sup> 集鳥ハ雙毛姓也 前漢書蘇武別李陵  
詩雙鳥俱北飛丁鳥獨南翔子當歸此館我當歸故鄉ト  
此意ヲ取ルナリ集ハ音職ニテ說大鳥丁枚也ト云正  
字通凡物不兩<sup>シテ</sup>曰集ト俗ノカタクト  
云フニテ雙ノ字トハ音義別ナリ

大至持の株が全昌幸トモアリモアリモ 大至持ハ  
云々トモアリ名カム今尤名トモアリ俗或ハ大至<sup>シテ</sup>全津佐のシテ  
錦行<sup>シテ</sup>往來の孫有アリ全昌もハ孫<sup>シテ</sup>トモアリモアリ  
一族の源<sup>シテ</sup>キ里<sup>シテ</sup>回ト 世說云王濬仲爲尚書令 著公服乘輶車經黃公酒  
壚下過顧謂後車客吾昔與嵇叔夜阮嗣宗共酣飲於此  
壚竹林之遊亦頽其末自嵇生夭阮公亾以來爲時所羈

繼々今日視之雖近邈  
若山河ト是意ナリ。瓦窓ト計ヤ衣寮ハ傳の鐘板也  
了令は重入雲ノ如レ禪家ニテ食時ノシラセニ擊ッ  
モノニテ楞嚴經ニ食糲擊鼓衆集撞鑼ト  
云類ナリ食堂ハ僧ノ食事ヲナス處ノ名也早卒子  
ノ下小下とて之を傍とも残破とつゝ元  
早卒ハ又倉卒凡書本字ハ憫卒ニテ心ノアワタ、シ  
キヲ云僧ハ釋氏要覽云梵語具云僧伽唐言衆念略稱  
僧也

### 瓦窓アモヤモリ瓦柳

あけ振向ハ拗びる世說補云郭林宗毎行宿  
逆旅輒自灑掃及明去後人至見之曰此必  
郭有道昨宿處也釋氏要覽云佛自執筆欲  
掃佛言掃地有五勝利是等ヨリ出ル作意

ナルベ  
キニヤ

### 吉崎の入江ヒツカヨ梅ノシテ汝城の松ヒムク

吉崎ハ大玉ある木御本の右の方桂枝ヒテ立ふれ  
菴店から併ヒテ入江一里四十町をうかがえどあの候  
みある人ありて北とかくまち等と云ふと代あつたがにと云々  
いきの案内役者あり其前吉崎ふたり皆乃浦坐とて一室  
東面門を構あり其上人名幕次から南の山とせんや山と  
花輪の去とて名あらり承立花輪ノドリ一里半の里は西面をす  
入はゆて北と升の浦をソヒ南は芭井浦と云ふ皆名古<sub>五</sub>年  
にのうちかねとくと在所ありひきもむほ景物也うきの入  
江より後身の腰掛の経けいとゆへアリて須坂村すゑむやを  
汝城村とて妙山と云ふ所也バウニ丘なり上平のうす  
廣く右れ多々サツカレルが故のあく汝のちくともあ  
わぬあり枝葉もまだ一枝をみゆまとまづくはうの松  
あらひて類稀なる勝景あ矣

和わまつるれりはとそにうき

月くと半くすれ汝の云

けむせん多くありのゆゑとて翁し人に付  
のくへ化して小也とあり山家余家余其が  
のをあるもせむかー因で旁へは作れ芭蕉  
上人は源氏かくはは家ア佐答テアセサ如  
山より湯と勝も小時  
すれ風情と叶々

手の筋どちらのがどく  
菊ハ莊子ニ所謂枝於  
手者樹無用之指也ノ

語ヨリ出タリ  
枝ハ六ツ指ヲ云

丸岡天龍寺の長老丸易ハ武井郡守なる又井博士  
ハ號列令次子俊一ノ庵と表と云ふのつ人  
ゑくいゆ湯をかるとあくま強人によ遙る

五十町山より水平ちと礼ひ道元禪師  
の法事や邦機千里を御くつむら山行五日と  
のこーりゆくも貴きゆくもとのや永平寺ハ越前  
國志比村ニ立

福井ヨリ三里  
丸岡ヨリ四里  
吉祥山ト號ス後深草院建長五年ノ草創北  
條時頼ノ修願ニテ曹洞禪宗ノ本山ナリコハニ  
町山ニ入トハ此寺領ノ入口ヨリ山中ノ寺ニデノ行  
程ヲ云山へ登ルアラス道元禪師姓ハ源氏京師人宋ニ入テ天  
童如淨禪師ニ謁レ曹洞宗ヲ傳ト云邦機千里ハ機  
ハ畿ノ字ノ誤ニテ邦畿ハ帝都ノ稱詩邦畿千里維民  
所止ト云是ナリ貴きゆくもとハおほふと先孝化と  
きゆくもとと云て僧師の云す重と名の義の如ト云

アハ末世トあり信成ハ聖俗ノ聖する所あらず  
先と固く教一テ神不哉あふ建立ナムモ多めり

福井ハニ黒木ノアリタルハ御身也トシヨリの如トド

福井ハ哉あ乃様トシテ都合の便うちも其うれ  
薰眉と半日休むるゝれけと云和訓の如き日を取ふ  
めれやうねのむかへうす人をえくと誰が彼うそ者  
あるは云をどく一ハダクと云タチモトヲルノ略ニ  
テ躊躇ト書行不進見及トツの哉と云古方と云士あ  
トス行ナヤムトナリ

名月と林道春徒然艸註ニ八月十五夜ノ月ヲ翫ト大  
氏季唐ヨリ盛ナリ古樂府嬌娥怨曲ハ漢人仲秋ノ月  
ナキニ依テ作トアレバ漢世ニモ翫ニヤト云リ又歐  
陽奮背月詩序文ニ八月十五夜ノ月ヲ云丈繁キユヘニ  
今日と歎安の爲シハ枚季すゞしすつううハ木ト角鹿ト書  
相傳崇神天皇六十五年任那國人來其人額有角到越  
前筈飯浦居二年故其處名角鹿ト云今後始と考當饭  
も多キ比とす海と名比の處と云敷契ハラナ波突那の角鹿也  
乃太陵少く云列小傍侯が領地ト云古名あらかうタヌキト云  
あらかうハぬる也山はとハラカウト云葉を以ての處  
の葉乃ムリスルアタマにあま名づくかはれの名のハセトトカ  
栢等ノ字ヲ用ユ尚書益稷隨山刮木禹貢隨山栢木周  
伯溫曰謂隨所行材木斫其枝爲道識也ト是ハ迷ベキ  
道ノ傍ノ木ヲ押刊或ハ枝ヲ折テ地ニ立ナドシ後ニ  
往來スル人ノ道表トナスフニテ和俗ニ是ヲシテリ  
庄技折ナリハタツキ庄云テ立木者すよきつともうと餘  
是なり今より人情通ふをしたの傍み本の株み残るをむ  
あひつりて金をナきぬこそそぞうの便身ハあのじやくま店

卷之二

三

上のの方へ出でる有川二町がこのりはやを坂と云ふ所あり此成  
あくまき往きよ石橋へて西行つち中央の橋乃る櫻花坂付くも  
をかにの橋の坂よりて北川と吉井とばかりと云ふ者を夜を  
乃むにみせとゆくもすきむすきあるものと川をさへあよまえ  
或人の名うきを鹿塚のを紀めたりよそうのく村と云ひり又あ  
よそく江ゆきまくしき村ゆき橋あり是をよことけ玉江を鹿鳴  
名をもすり 方角あ学ぶれ第つるあすふらまくれ学ぶの東ハ園の東とくふ  
常のあすふ今度傍湯と冥びの巣とよすすゆと頃乃く居しの  
省すまくあす店河と湯屋宿とアリのあねゆうて駿河千葉  
店三め御りあつと仰せしりと呼んで此處の宿の稱也。危険跡と仰りて鹿  
鹿のちりと仰りて此處の宿の稱也。子孫もれらのちりと仰りて鹿  
其の孫乃鷹乃と云ふうきと鷹一極び孫を湯屋代向ひ乃  
ゆゑと本多義仲乃孫跡ゆきのゆうゆうと云在西農  
上の山と云ふと本多ハ アマタクセ 瑞瑠山と云ふと海跡の事と揚イ 鍛冶ラ  
誤ルガ 遊 遊音と轉誦してくる山と云ふと本多ハ アマタクセ 瑞瑠山と云ふと海跡の事と揚イ 鍛冶ラ  
あくまきの山と云ふと本多ハ アマタクセ 瑞瑠山と云ふと海跡の事と揚イ 鍛冶ラ

孫明復八月十四夜  
詩銀漢無聲露暗無  
明夜陰晴未可知ト此句ニヨレリ  
あんの御神子故  
人皇十四代仲哀天皇ノ靈ヲ祀ル當國ノ一宮ナリ古事紀云故  
建内宿禰命率其太子仲哀天皇爲將禊而經歷淡海及若狹國  
之時於高志前之角鹿造假宮而坐舊事紀云二月幸角  
鹿即興行宮而居之是謂笥飯宮ト是ナリ鎮座ハ神功  
皇后十三年始祭笥飯神ト云リ按ハニ笥飯ノ字面ニ  
據併ハ此地ニテ天皇午時飯ノ行厨ヲ開キ玉フ故ノ  
名ナル  
ベシ  
社之神さびく  
ツカニサビシキサヘナリ  
又社中僧車來ガ説ニハ風ノ字トス俗ニ男ブリナド  
云意ニテ神サビテハ神ブリト云フナリ日本紀神代

卷ニハ進ノ字ヲ用エ伊勢物語ニ翁主毛人ふらの毛人ト  
孫一毛翁ス、ミト云心ナリ又躬恒ノ祕藏抄ニハ上  
久ト書テ和訓サビト讀セ昔ヲ  
慕心モアリト註セリト云リ

於也二世の上人畧

泥湯とかけりと中  
累うるど在りのゆすりと

侍る遊行宗ハ本号時宗ト云一遍上人ヲ元祖トス  
熊野權現ノ告ニ依テ諸國ヲ遊行シ決定往生  
六十萬人ノ札ヲ衆ノ人ニ與故ニ俗遊行宗ト稱ズ本寺  
ハ相州藤澤驛ニアリテ藤澤山清淨光寺ト號シ百石  
ヲ領ス此宗儀ハ巡國ノ間ヲ以テ住職トシ藤澤ノ本  
山上人ヲ隱居トスニ世上人ハ一遍ノ弟子ニテ他阿  
彌陀佛ト云傳記是ヨリテ代代遊行住職ノ僧ヲ他  
阿上人ト稱ズ上人トハ釋氏要覽云古師云內有智德  
外有勝行在人之上名上人ト又車來說ニ日本ニテ僧  
綱ヲ賜ニ法印法眼法橋ノニ位アリ此ウチニテ初位  
法橋位ノ僧ヲ上人ト稱ズ遊行ハ禁庭ニテ唯遊行木  
道心ト口宣アレノニ位階ノ沙汰ナシ今上人ト呼ハ  
入松門の友内ふ砂石とぬむ  
由一木とてぬの縁とぬむを定

一泓ノ稱號ノミ然比參内ノ式ハ甚嚴重ナリト云リ  
渟ハ字彙水止也トアリ卑俗ノ云井コリノフナリ遙  
引のゆきハ其後代ニ上人曰ム乃付ゆく事今ニテ  
砂石とそび社院の前後を云平安やあく車今ニテ  
引施アリするを云社院橋つのかよ木履と多くあくを雲  
余裕の事若千するを云のとげ本底ふとてうく橋つの因よ  
入松門の友内ふ砂石とぬむ  
由一木とてぬの縁とぬむを定

十字主毛人

ゆすりの小貝もうりんと種の湯すゆとまで

半はのや貝ハ後あみ湯よりゆくとまだ一毛翁樹とゆ  
ゆく貝もみかたを事はこゆみ翁樹のめーとゆううちを  
すは八十才後とゆき翁の樹乃もさと云はすほ乃<sup>是</sup>是ゆ  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
あどくあどくのあどく見とゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

ちの異僕あまくあすきのやく 天弓のあま  
ふ多一、ちやふ今仰名大趙とあらゆる祖父経がおもてと  
傳ひうると云傳ふ僕ハ字書給事者也トアリ俗ノ小使ヒ  
ノ者ト云類ニテ召使ヒ 供ノ男ナドノフナリ 他トモ法もぢり 中文  
がいのらびーとを萬フニ持ト 云り 法花寺ハ日蓮宗法寺  
天台宗もあり今又蓮法乃名と云はれハ太保也私称をタ  
ゲルのさもーらとは秋のやまともの深麻を称する事蓮り併シ  
和音ヨニテ何り五人一堂ト云是のう  
あ梨仰毛モササガル不思議を奉事す

山王一山や源磨よりうちある源の故

源磨源源源也忠政のうじもあす  
せもくはすみ蘆とやハルギーきかふ其名ばや  
とめり古歌ふも多く雨寂蟲林神とのぐま

通もせみちくまくせむくひてうの國ーと  
伴よ弱よ坐すくきく大極の床よ入ぞ曾  
らも伴ちうりあまなに城人をるととぞをす  
如行づ家ト入參す前川す前口父すまの  
ちよーに人よは取立すひて蘇生乃り  
あらゆるよしと見ゆる小舟舟ふすあま、バ伴  
勢の邊言おのアんと又あふつりて 痘瘡ハ仰古より  
はれ産不一で一旦立合の後男ありと若取立と傳と有り人  
と一あら、俄人や引前川も皆森の筋すかく俄人立尾別名

護を小治にやり前口前川を皆大臣が奉事大臣ハ中御主の陛下  
を元内侍の様下りる薦生ハ本家興生よりヨミガヘルト訓  
スツリするハ勞の多也古訓子ギラフト云名日ハ内侍の多  
き至矣矣お下り候やく長き在小板長月とちを候テ  
長月とくらや伊勢左弐守お達官ハ二十一年目小治を  
九月晦日乃夜也○梅がねは学一年ハ一ノ幕は既あるれも又  
勞とのづく健する迫あれ是亦和謹文書の  
一格ふくさる君は筆落處間無すだうがふと

蛤のぬくみナワハリ秋リ

金樂寺大中は輔弘の弟ふむうけニ元は蒲  
の貝もももあきぬきぬよぬよぬよぬよ  
詠ももて葉小野一ぬくまと  
きのけナヌ一あれを一

奥細道草蔬お下

後

官禁おいておもへ後をめがくすおおきへよ  
アリ写すもあらず不讀美書書不行千里區  
通解少陵之詩と實も書のあまのおくか  
いはりやのやどくちれど牛馬ももく入  
草すもあらずえ味の深長あらす筆えむ老人  
あくよき心をアラク聞かうまことに和風のすよ  
うき詠とアラク聞かうまことに和風のすよ

詔のとうとくうちを絶かづくまつわり  
こみ抄とくとくあくとく方丈のくぼとく手写の稿  
とせんこれ人をもといふ細道のかくをうとひる  
ひきやあうれどあうる名所とあすりとあくと  
まよひと大よけすき人をおかまくよあつむお  
おひくよきうかんと書つてうきよも

蝶變幻阿弥陀佛



奥の細道爰惹抄附録追々出来

安永七年戊仲株

江戸

山崎金兵衛

大坂

河内屋茂兵衛

蕉門書肆

京都

井筒屋庄兵衛

橋屋治兵衛

